

よび尿路変向術を施行した99例を若年者群：75歳未満73例（中央値67歳）と高齢者群：75才以上（中央値78歳）の2群にわけ、術前の患者背景、周術期の因子および無病生存期間について比較検討した。

【結果】術前の患者背景として、性別・組織型・術前診断・術前化学療法・尿路変向法等を検討すると、尿路変向法のみが2群間で有意な差を認めた（高齢者群：失禁型24例 非失禁型2例 vs. 若年者群：失禁型46例 非失禁型27例, $P<0.01$ ）が、他の因子については有意な差を認めなかった。周術期の因子としてClavien-Dindo分類による合併症の発症頻度、出血量、手術時間、および術後入院日数を検討したが、いずれも2群間で有意な差を認めなかった。術後補助化学療法は若年者群で多く施行されていた（高齢者群：1例施行、若年者群：28例, $P<0.01$ ）。観察期間の中央値28ヶ月（1ヶ月-120ヶ月）において無病再発期間をKaplan-Meier曲線で検討したところ、若年者における1および2年無病生存率は72.8%および59.6%だったのに対して、高齢者群では64.6%および58.7%で2群間に有意な差を認めなかった（log-rank $P=0.85$ ）。

【結論】高齢者においても浸潤性膀胱癌に対する膀胱全摘除術は若年者と同等のアウトカムを得られると考えられた。

9. 分娩後多量出血による母体搬送例の検討 産婦人科

○牛尾 友紀 有澤 理美
番匠 里紗 平田 智子
小山 美佳 登村 友里
中澤 浩志 西田 友美
河合 清日 中務日出輝
中山 朋子 小高 晃嗣
水谷 靖司

日本の妊産婦死亡率は周産期管理の進歩により減少し、世界トップレベルである。妊産婦死亡原因の第1位は、依然として出血であり、約

300人に1人の妊婦が多量出血による生命の危険にさらされている。分娩時異常出血に対して、1次施設では初期対応を行い、タイミングを失することなく高次施設に搬送する必要がある。周産期母子医療センターである当院は、分娩後多量出血による搬送先となるわけであるが、産科出血は、一般手術などの出血と比較して急速に全身状態の悪化を招きやすく、また、容易に産科DICを併発しやすい特徴があるため、産科医師・助産師・病棟看護師の産科スタッフのみならず、救急外来スタッフ、放射線科IVR医師、麻酔科医師、放射線技師、検査技師等と連携を行い特別かつ迅速な対処を要する。すなわちチーム医療が救命の大きな鍵である。

今回、当院への分娩後多量出血搬送例の統計、対処方法、問題点、将来への提言を発表する。

10. 憩室炎を契機に発見された後腹膜脂肪腫 の1例 外科

○河合 毅 半澤 俊哉
福本 侑麻 藤本 卓也
畑 七々子 西江 尚貴
坂田 寛之 坂本 修一
國府島 健 森川 達也
遠藤 芳克 信久 徹治
渡邊 貴紀 松本 祐介
甲斐 恭平 佐藤 四三

【緒言】後腹膜脂肪腫は後腹膜の脂肪組織に由来する比較的稀な良性腫瘍である。一般的に症状が出現しにくく、増大した状態で見つかることが多い。また画像検査では悪性腫瘍を否定することが困難な場合も多く、腫瘍被膜を損傷せず摘出することが望ましい。

【症例】40代女性。右季肋部痛を30代頃より繰り返し、横行結腸憩室炎の診断で保存的加療を繰り返していた。憩室炎に対する術前精査中、造影CTで初めて骨盤内に境界明瞭で内部均一な腫瘤を指摘された。MRIでも同様に後腹膜に境界明瞭で脂肪以外の部位の信号

は乏しい腫瘍を指摘され、画像上は脂肪腫の可能性も指摘されたが、頻度から脂肪肉腫の可能性が高いとの見解であった。切除標本は130×60×50mmの均一な黄色腫瘍で線維性隔壁を伴った成熟脂肪腫の増殖が認められ脂肪芽細胞や異型間質細胞は明らかではないため現段階では脂肪腫との診断である。

【結語】後腹膜脂肪腫の1例を経験した。若干の文献的考察を加えて報告する。

11. 臀部の皮弁術後に陰圧閉鎖療法を併用した2例

形成外科

○沼 美由紀 高田 温行
最所 裕司

臀部の皮弁術を行うにあたって問題となるのは、汚染しやすいことや創部の安静が得られにくいことが挙げられる。しっかりと固定を得るためには汚染しにくいようドレッシングを行う必要があるが、皮弁が視認しにくいことが欠点である。また術後は長期間床上安静が必要となるため患者にとってストレスが大きい。

そこで我々は臀部の皮弁術後に陰圧閉鎖療法を併用することで、患者に安静を強いることなくしっかりと固定が可能となり、良好な経過が得られたため報告する。

12. 特発性正常圧水頭症に対する髄液シャント手術の有効性の検討

脳神経外科

○新光阿以子 皮居 巧嗣
高橋 和也 高野 昌平

特発性正常圧水頭症は歩行障害・認知症・尿失禁を3兆候とする疾患で、「治療により改善する認知症」として知られている。

しかし、これらの症状は、高齢者一般によく見られる症状であり、また、画像上、脳萎縮との区別に難渋することもある。手術適応を判断するために、髄液排除試験を行い、効果が得られた症例に対しシャント手術を施行すること

が、ガイドラインで推奨されていたが、近年の研究の進歩により、正常圧水頭症に特徴的な画像所見が、シャント手術の有用性に役立つと考えられている。当科でも、髄液排除試験を行い効果が得られたと判断した症例や、画像上典型的と考えられる症例に対し、シャント手術を施行している。

今回、典型的な画像所見を有しかつ髄液排除試験でも効果が得られたためシャント手術を行った症例と、画像所見は典型的ではないものの髄液排除試験で効果が得られたためシャント手術を施行した症例の、術後経過を比較検討し報告する。

13. 院内がん登録データを利用した他施設との初回治療の実績比較について

がん診療連携課

○安東 正子 井上 豊子

当院は、国指定のがん診療連携拠点病院として、国立がん研究センターへ院内がん登録のデータを提出している。院内がん登録の目的には、自施設のがん診療の実態の把握・評価を行い、かつ他施設との比較により、がん医療の質の向上を図ることがある。

この度、国立がん研究センターが2016年症例の全国集計を公表した。このデータを用いて、当院の兵庫県における5大がん（胃、大腸、肝臓、肺、乳房）の治療実績割合を集計、また全国の施設と比較した結果を報告する。

1年間に当院で初回治療が実施された件数は、データ提出した兵庫県28施設の中で、乳がん336件（14%）、肝細胞癌103件（11%）と最も多く、全国では772施設中、乳がん23番目、肝細胞癌15番目に初回治療の実施件数が多い状況であるとわかった。

今後も、院内がん登録データを利用して当院のがん診療の特徴となる統計を提示していきたい。